Vol.．278　中房総国際芸術祭　（平成26年4月25日）

去る4月16日、市原商工会議所の榊原会頭に招かれて、3月21日から開催されている「いちはらアート×ミックス」の見学へ行って参りました。

20世紀の文明は豊かで、にぎやかな都市、経済中心の世界を求めて生きて参りましたが、その都市が疲弊し、孤立化社会が急速に進んでおります。戦前、戦後、日本人の心を支えてきた連帯感が失われて、物を求めて、心を病む人の街が広がって居ります。

こうした片寄った孤立社会を修復しようと新しい動きが始まっております。

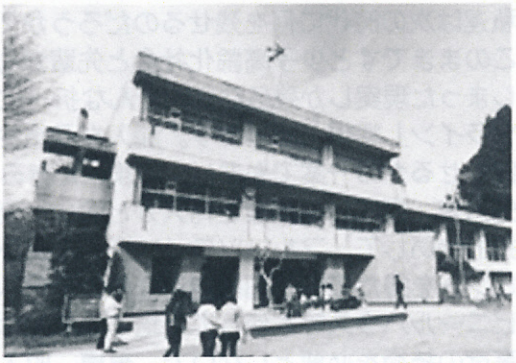
全国の過疎化の進む中で、大自然の中の豊かな景観資源、遺跡、心温まる民族の生活文化をアーティスト達によって広域観光行政をつなぎ、人々を回遊させ、にぎやかなつながりを取り戻そうと言う新しい里山、里海運動が始まっております。新潟県十日町市の「大地の芸術祭の里」であり、瀬戸内の多くの島々をつなげた「瀬戸内しまのわ2014」があります。これらをモデルに、市原市が市政50周年記念事業として、数年前から準備が進められてきた「中房総国際芸術祭いちはらアート×ミックス」であります。

市原市は、わが君津市とも隣接する東西に巾29ｋｍ、南北には千葉市、鴨川市との境を持つ40ｋｍもある県内最大の面積を持つ人口28万人の都市であり、周知の様に北部は全国15のコンビナートの内、4か所を持つ日本最大のコンビナート群を擁しております。南部は緑豊かな自然や、渓谷、里山が美しい原始的風景を残しておりますが、少子高齢化が進む過疎地域となっております。

その高滝、里見、牛久、内田、月崎、養老渓谷エリアの高齢過疎化問題が解決し、地域の活性化をと「晴れたら市原へ行こう」を標語に、この芸術祭は開かれております。

大型バス見学では全コースは見られませんので、先ず新装となった前衛的な市原湖畔美術館と隣接する藤原式揚水展望台、高滝湖上に浮く「湖の飛行機」、廃校となった里見小学校は卒業生や地域の人達の協力で、ギャラリーや古教室の保存に活用されており、玄関先の屋台のカレーは美味しく、残された教室で同窓会？が出来たらいいだろうなと思いました。

内田、月出、白鳥小学校は「未来楽校 工舎　いちはら人生劇場」等リニューアルされていると聞きましたが、後日に残して小湊鉄道飯給駅に「世界一の大きなトイレ」があると聞いて訪ねると、トイレは黒い木塀に囲まれた70坪くらいの広さで、ガラス張りの個室に普通の便器が一つあるだけと、あっけにとられ、苦虫をつぶした顔して記念写真を撮りました。



この地の古い友人で、作陶家岸本恭一先生は「こうした新しい芸術文化は広がって行くでしょう。楽しみですね！」と喜んでおられました。

参加するアーティスト13か国、地域から57組、目標約20万人30億円の経済効果、もっと期待したいのは、作家達がこの地へ定住し、継続的に地域の活性化を推進され、近隣へと広がってくれれば良いと願って帰って参りました。

皆様もゴールデンウィークには1日割いて見て来て下さい。お土産には「市原ミルフィーユ」は大好評でした。

中島千波の絵を思わせる高滝、里見、飯給駅頭の古色蒼然たる老木の桜は一見の価値があります。